

「ベトザタの池で病人を癒やす」

2024年10月17日

エルサレムには羊の門のそばに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。その回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたいか」と言われた。病人は答えた。「主よ、水が動くとき、私を池の中に入れてくれる人がいません。私が行く間に、ほかの人が先に降りしまうのです。」イエスは言われた。「起きて、床を担いで歩きなさい。」すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。その日は安息日であった。(ヨハネ 5:2~9)

エルサレムの羊の門の傍に、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、五つの回廊で取り囲まれていた。回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人など、医者からも家族からも見放された重病の人たちが大勢横たわっていた。言わば、生ける屍のような人々が横たわる回廊であった。主イエスはベトザタの池の回廊に足を踏み入れられた。池には天使が降りて来て、水を動かした時、真っ先に入る者はどんな病気も癒やされるという言い伝えがあり、その癒しを求めて、重病人が集まっていたのである。そこに、38年も病気で苦しんでいる人がいた。主イエスは、その人が病気に侵され、長い間、ここで横たわっているのを見て、「良くなりたいか」と問われた。病人は誰も良くなりたいと願っているが、主イエスはあえて、回復を望んでいるかと質された。病人は、問いに答えず、「主よ、水が動くとき、私を池の中に入れてくれる人がいません。私が行く間に、ほかの人が先に降りしまうのです」と愚痴った。彼は長い病気で体が動かなくなっていた。水が動く時、池に入れてくれる人がいない。自分が池に入る前に、他の人が先に降りてしまい、助けてくれる人がいないと回復への望みを全く失っていた。主イエスが、「起きて、床を担いで歩きなさい」と命じると、彼は即座に良くなって、床を担いで歩きだした。主イエスの宣言は、病気を癒す力を持っていたと証言している。

彼が癒された日は、律法で何の労働もしてはならないと定められた安息日であった。律法を厳守するユダヤ人たちは病気が癒されたその人に、「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない」と詰め寄った。彼は、「私を治してくださった方が、『床を担いで歩きなさい』と言われたのです」と、自分の落ち度ではなく、他の人に命じられたからだと弁明した。彼らは、「お前に『床を担いで歩きなさい』と言ったのはだれだ」と尋ねたが、主イエスは群衆に紛れて立ち去られていたので、誰が癒してくれたかを知らなかった。その後、主イエスは、神殿の境内で彼と出会い、「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない」と、責任ある自立した人間になるように言われた。ところが彼は、ユダヤ人に自分を癒したのはイエスだと告げ口した。彼は癒してくださった主イエスよりも、律法違反を追求するユダヤ人の方が怖かった。長い闘病で、彼は心が萎え、真に感謝し、畏れるべき方を見失っていたのである。主イエスが安息日に癒す律法違反を犯したと知って、ユダヤ人は主イエスを迫害し始めた。しかし、主イエスは、「私の父は今もなお働いておられる。だから、私も働くのだ」と答えられた。安息日の律法を破るだけでなく、神を自分の父と呼んで、神と等しい者とされたので、彼らは、ますます、主イエスを殺害しようと付け狙うようになった。